
あの頃から・・・

岸川 澗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの頃から・・・

【Nコード】

N3268X

【作者名】

岸川 漣

【あらすじ】

「生か死か」の続編小説

志保が家を出てってから10年がたった

ずっと顔も見せず、電話もよこさないでどこかにいる

そんな時新一たちの前へ・・・

恋愛ですが、新志ではありません

完全原作無視

10年後

「なあ博士・・・確かこの日だったよな」

「ああ、そうじゃ」

俺、工藤新一

10年前に高校生探偵として活躍して、今は私立探偵として活動している

「アイツ、顔出すからって言ったくせに、最初の一ヶ月にここに来たつきり、電話もよこさねえしはがきもださねえし・・・」

「電話はするんじゃないが・・・すぐに切られてしまうんじゃない・・・」

「俺がかけたらでねえし」

この話に出てくる「アイツ」とは、10年前ここを出た宮野志保のことだ

「住所は？」

「引越したらしくて、もうそこには違う人が住んでいるんじゃない」

「つかあ・・・」

再会

「じゃ、俺帰るわ」

今日が誕生日の蘭と家でパーティーをすることになっているから

俺が博士の家を出ると、俺の家の門の前に立つ人物が見えた

「あの・・・」

振り返った人物はFBIの赤井さんだった

「やあ」

「お久しぶりです

どうされました？」

「君を迎えに来たのだが・・・いなかったみたいで
乗って」

赤井さんは突然家の前に止めた車に俺を乗せた

「ちょっと・・・」

「君に逢いたいという人がいてな」

赤井さんはそういつて車を走らせた

着いた先は、車で普通に走らせて10分ほどのところにある大型のマンションだった

車を運転しない俺は知らない場所だった

俺は赤井さんについていくと、ひとつの家の前にたどり着いた

そのの表札には、「赤井」と書かれていた

「ただいま」

「お帰りなさい」

家の中から出てきたのは――

「アイツ」だった――

依頼

「宮……野……?」

「工藤君……」

あがって?」

何も変わらず、10年ぶりだというのに普通の顔をしている彼女の腕の中には、2歳くらいの女の子が抱かれていた

俺はリビングの食卓テーブルに座らされ、前には二人が座っていた

「宮野……どういうことだ?」

「言っただけだったわね……」

私、結婚してるのよ……」

「は?」

「博士も知ってるはずなんだけど……」

「は?は?」

「今日あなたを呼んだのは、話があったから……」

「なんで？」

電話でもなく？

なぜに？」

「そうねえ・・・」

電話だとなんとなくしゃべりづらかったし・・・

私こんな感じで手が離せなかったし・・・」

「んで？」

「えっと・・・結婚したってことと・・・」

二人娘がいるの・・・」

「二人?!」

「ええ・・・」

今は学校に行ってるけど・・・」

「で？」

たったそれだけのために俺をここまで？」

「いえ・・・」

あなたに依頼したいことがあったの・・・」

「なんだ？」

組織の事なら嫌だぜ」

「あら、依頼にも好き嫌いがあるのね

でも・・・今回はちょっと違うかしら・・・」

「んだ？」

「私の、両親のことについて調べてもらいたいので・・・」

「は・・・？」

娘

「お前の両親の事・・・？」

「ええ・・・」

私の両親のことについて、何もわからなかったの・・・

・ この人も日本にいるからFBIとしてあんまり活動してないし・・・

だから、調べてもらいたいの・・・

私の両親が働いていた研究所はすべて控えてあるわ

これ・・・」

彼女から差し出されたメモにはたくさんの名前がつづられていた

「わかった・・・」

「ただいまー」

「穂乃華お帰り」

「誰？」

「ママたちの友達」

「長女？」

「ええ・・・」

「こんにちは・・・」

「こんにちは」

「穂乃華」と呼ばれた子は廊下へと走っていった

「何歳？」

「11歳」

「え？」

「私の娘じゃないもの・・・あの子・・・」

「誰の？」

「俺の親戚だ」

「それで・・・だいぶ前から預かってたらしいわ・・・」

「へー」

「そのこは？」

「こっちは秀美」

「2歳で、私たちの娘」

「ふうん」

「にしてもお前、電話ぐらいかける」

「俺がかけたとき切るな」

「出たくなかったから」

「は？」

「心配かけたくもなかったし・・・」

なんとなくチャンスがなかったというか・・・」

「結婚したら俺に言えよ」

「言いたくなかったから・・・」

「はぁ・・・」

でもどうして二人が？」

「私が働いていた研究所になぜかこの人が来て・・・」

それで仲良くなって・・・」

ほら、いろいろあったから・・・なんとなく・・・ね・・・」

「はぁ・・・」

俺帰る」

「おくつてあげて？」

「あぁ・・・」

「今度からは電話したら出るよ」

「ええ・」

娘（後書き）

最悪だ・

捜査

俺は家に送られてから調べ始めた

渡された紙に書かれた研究所の中には、もうなくなっているものもあつた

「つと・・・」

日下部研究所・・・ここか・・・」

「すみません」

「はい・・・」

「……」

「」

「そうですね……」

「でも……あれから何年もたって……」

「……?」

「娘さんの明美ちゃんが来たんです……」

「え……?」

「もっと詳しく……」

「宮野君には、娘さんの明美ちゃんと、もう一人、志保ちゃんって言う子がいたんですよ……」

「もう二人とも大人になったろうなあ……」

「と……?」

「最後に会ったのが……確か明美ちゃんがもうすぐ小学校に入るって言うときで、志保ちゃんが3歳の時だったんですよ……」

あれからずっとあっていないなあ・・・

宮野君にも会っていないから・・・」

「そうですね・・・」

「それで何年もたった後・・・大きくなった明美ちゃんが・・・」

空想

「すみませーん」

「はい」

「あの・・・所長さんですよね？」

覚えてます？

宮野厚司とエレーナの娘の・・・明美です！」

「ああ・・・明美ちゃん！

大きくなっただんなあ・・・」

「あの・・・」

ここに・・・両親来ませんでした?」

「ふたり?」

こないこない

もうあの二人には何年も会ってないからなあ・・・

どうしたんだい?」

「いえ・・・」

何でもありません

今度、妹の志保も連れてきますね!」

「ああ・・・楽しみに待ってるよ」

終了

「あれが確か・・・12年前くらいだよ」

「だろっなあ・・・」

「ありがとうっございました・・・」

捜査

次に行ってみたのが高野製薬研究所というところだった

「すみません――」

昔ここに働いていたらしい宮野厚司さんとエレーナさんのことについて伺いたいんですが・・・」

「はい」

何日間も着続けているような白衣を羽織ながら出てきたのはロングヘアをひとまとめに束ねた中年女性だった

「私、エレーナさんとは研究友達というか・・・私が後からこの研究所に来たんですけど、そのときいっしょに組んでくれたのが宮野さんで・・・」

厚司さんは違う分野だったみたいですけど

それで・・・結局仲がよくなって

それから3年後ぐらいだったかしらねえ？

他の研究所に移るからって言ってこの会社を退職されたのは

私は入社した当時大学を卒業したばかりでしたから、よくわかって

いない私に親切にしてくれましたよ

でも確か彼女、イギリス人でしたよ・

でも彼女・イギリスの事何にも話してくれない無口な人で・

何も自分のことを言ってくれませんでした・

彼女、私と組んでしていた研究とは別に・長年していることがあつたみたいだけど・その研究の内容も・経過も話してくれませんでした・

本当に何も自分の事について話さない人でしたねえ・

「最後に会われたのはいつですか？」

「そうですね・8年前です・」

「え・・？」

() となると・アイツが20歳の時だよな・

本人の話によると、自分が生まれてからすぐに死んだという話・

「その日、どのような用件で？」

「来たのは、エレーナさんだけです・」

用件というか・・・この研究所に今まで私を訪ねてきた人はいなかったかと聞いてきたんです・・・

あなたみたいに、彼女がどうしているか知らないかと聞いてくる人がいないかと・・・

「それで？」

「いないと答えました・・・

いませんから・・・」

「そうですか・・・」

「あなたは どうして？」

「僕は・・・人に頼まれて」

「そうなの・・・」

「ありがとうございます・・・」

俺は研究所を出てからずっとある仮説が立てられていた

捜査（後書き）

ひどい名前の研究所ですね W

地獄のそこから這い上がってくる悪魔

俺は町から外れた研究所から帰ってくる途中

それは突然だった

「ん？」

もしもし・・・」

「工藤君？」

お願い

今すぐ私の両親の捜査を打ち切って!!」

「はあ？」

「おねが・・・ プッ」

「あんだよ・・・」

でも・・・」

ブーッブー

また電話がかかってきて、出てみた

「はい・・・」

「あ・・・工藤君か？」

「赤井さん？」

「悪いんだが・・・志保をしらないか？」

「アイツですか？」

さっき電話があつたんですけど・・・」

「内容は？」

「今すぐ自分の両親の捜査を打ち切ってくれて・・・タダそれだけ・・・」

「という事は・・・まさか・・・」

「どうかしたんですか？」

「2時間前からいないんだ・・・」

俺が仕事から帰ると・・・ぱったり・・・」

「そんな・・・」

「多分、組織の見つからない人間だろう」

「ッてことは・・・」

「間違いなく、志保を殺す」

「俺もついていきます!!」

「じゃあ・・・米花駅で」

「はい」

事実

俺はすぐにタクシーをひろい、すぐに米花駅へ向かった

米花駅に行くと、そこにはもうすでに赤井さんはいた

「乗れ」

俺は助手席に座ると、運転席の方を見た

「場所に調べは着いている

恐らく、隣町の廃止になった研究所だろう

シートベルトをしてしっかりどっかにつかまってる

頭打つぞ

そういつて赤井さんはレバーを思いっきり引き、突然スピードを上げた

「ちょ・・・赤井さん、飛ばしすぎ」

「こんなもんだ」

「警察に捕まりますよ?」

「FBIだといえば大丈夫だろう」

「いやいや」

「舌嚙むぞ!」

そういつてさらに速度を上げた

それから5分後、泥だらけになりボロボロでも入りたくないよ
うな建物の前に車を止めた

「ここからは、たとえ見つからない一部の人間だとしても組織
の人間

油断できない

ほれ

俺の前に差し出されたのは真っ黒の拳銃だった

「俺の予備だ」

「はい」

そういえば赤井さんは日本でFBIとして生活しているんだっただから拳銃も何丁も常備しているわけだ

グローブボックスにひとつ、いつも胸ポケットにひとつ、そして腰のベルトにひとつ

恐らくこれはグローブボックスのものだろう

俺は拳銃を受け取り下に向けた

（建物内）

「ん・・・」

私・・・組織の残りの人物に押さえられて・・・そうだわ・・・工藤君に電話をしたところでまた気絶して・・・

「お目覚めか」

「アクアピット・・・」

「シェリー・・・」

「あなたが私を抑えたのは・・・」

「お前の両親は・・・」

「死んでいない」

「な・・・」

「こつちもわかってるわ」

「そうか・・・」

お前の両親を監禁しているのはこの俺だ

でもお前は人に調べるように頼んだんだろ？

でも事実を知られちゃ困るんでな

お前には死んでもらおう」

「くっ・・・」

「悪いが、何を言っても無駄だ

さっさと死んでもらおう」

そういって拳銃を向ける

「くっ・・・」

ありがとう

そのとき・・・

ダン！

ガシャン・・・

何かが破裂する音と何かが床に落ちる音が耳をくすぐった

音のなつた方を見るとそこには秀と工藤君が拳銃を持っている

アクアビットの方を見ると、肩を押さえ、その手の中から血があふれていた

秀が撃った・・・

「大丈夫か？」

「ええ・・・」

「ジョディを呼んだ

お前は工藤君と帰れ

俺はジヨディと本部に行く

しばらく帰れないだろう・・・

「わかったわ」

「赤井さん、はい」

「どうも」

「じゃあ・・・」

「じゃあね・・・」

「ああ・・・」

私は工藤君に連れられて帰った

「それで、結果は？」

「まだどこなのかわからないけれど、お前の両親は、まだ生きてる・・・」

「そう・・・」

じゃあ後のことはFBIが片付けてくれるわ

「おう」

「あなた・蘭さんどどどっ？」

あれ以来

「普通だよ」

「そう・・・」

お幸せに

蘭さんにも伝えておいて

こいつの口から出てくる言葉の内容よりも、その言葉の出す形式カタチの方が悲しげで、優しげだった

「じゃあな」

「ええ」

彼女は外まで見送ってくれた

「今日はありがとう」

「いや・・・」

「じゃあね」

彼女はそう言ってマンションの中に入っていった

連絡

あの事件から半月

赤井さんの話だと、あの人間は、宮野を恨んでいたための復習をしようとしたらしいが、それが未遂に終わった・

というものだったらしい

俺は、これですべてが平和になった、そう思ってたんですけど

「ねえ新一、携帯、なってる」

「へ？」

ほんとだっ！」

電話を取ると、その人物は意外にも予想外の人だった

「もしもし？」

「赤井・・・さん？」

「ああ・・・」

「まさか、アイツに何か・・・！」

「いや・・・違う・・・」

今日の夜7時、あいてるか？」

「はい・・・」

「じゃあ、君の家に行く

待っててくれ」

「わかりました」

「じゃあ」

赤井さんはたったそれだけを残して電話を切った

「新一、なんだった？

また事件？」

「いや・・・知り合いから今日の7時会いたって・・・」

「ふうん」

蘭はほつとしたように前を向いた

ちょうど次の数学の先生が来たところだった

俺は赤井さんに話されることを考えながら、授業をぼんやりと聞い

て
い
た

頼み

家のチャイムがなり、今が七時だという事をはじめて認知した

俺は黙ってドアを開けると、そこには、いつもの赤井さんがいた

「どうぞ

今コーヒー淹れます」

「いや・・・いい」

「・・・」

俺はそのままイスに座り、赤井さんと向かい合った

「それできょうは・・・」

「今日は・・・君に頼みごとを・・・」

「たのみごと？」

「ああ・・・」

「それは・・・」

「志保の事だ・・・」

頼みなんだが・・・これからも志保と会ってくれないか？」

「・・・え・・・？」

「どういことですか？」

「知っているか？」

志保が、君を好きだったことを・・・」

「ええ・・・」

「今も・・・きつと思っっているだろう・・・」

君の事を・・・」

「まさか・・・」

「だったら・・・赤井さんとどうして・・・」

「頼まれたんだ・・・」

志保が米花町を離れて・・・半年くらいたった頃・・・志保のほうから俺に連絡をしてきて・・・

結婚してくれないかって・・・

いろいろ過去があつて・・・すべて吹っ切りたいからって・・・」

「・・・そうなんですか・・・」

「でも、きつと今でも君の事を思っている・・・

だから・・・これからもあつてやってくれ・・・

きつと志保の性格だ

自分から『会いたい』なんていわないだろう・・・

頼む・・・」

赤井さんに頭を下げられ困った

「わ・・・わかりました・・・」

「ありがとうございます・・・」

「いえ・・・」

俺は断ることなんて出来なかった

理由もなかった

俺の命を救ってくれた人だったから

たった一度、アイツに対して思ったことがあった

「好きだ」と……

余命

「わかりました・・・」

「それ・・・と・・・」

突然赤井さんの顔色が変わった

「実・・・は・・・」

「・・・なんですか・・・？」

自分の胸の鼓動が早くなるのがわかる

「実は・・・志保は・・・もう長くないんだ・・・」

「え………？

どういふことですか？！

アイツが……アイツがもう長くないなんて……！」

「半年前だ……

志保が突然胸の痛みを訴え倒れたのは……

救急車で運ばれ……大きな病院でいくつも検査を受けたんだ……

そして……わかったんだ……

志保は・・・心臓病だという事が判明した

原因は恐らく、あの薬の解毒剤だろう・・・

志保は他の病院で治療を受けると嘘を言って退院したんだ・・・

あの解毒剤の影響が強すぎたために・・・あれからじゆうなん年もたつた今・・・発病してしまった・・・

もうだいぶひどいらしく、治療できるような見込みはない

心臓移植をするためドナーを探しているが、見つかりそうもない」

「・・・・・・・・それで・・・アイツは後どれぐらい・・・」

「・・・・・・・・よくて後2年

悪くて半年だ・・・」

「・・・・・・・・そんな・・・!」

「今もなお不安定な状態で、いつ発作が起きてもおかしくないが、志保の意志で入院はしていない」

後残り少ない時間を病院で無駄にしたいくないという、志保のわがままだ」

「……俺のせいだ」

俺が何度も……何度も解毒剤を飲んで病気なんかになって……

あいつの体で俺の治療を出来る環境にしたから……っ……

俺が……俺が……」

「やめろ……」

志保も、君が自分を責めることは望んでいない

志保からの手紙だ

君宛に」

「ありがとうございます」

「また、会ってやってくれ

「生きているうちに・・・な？」

「はい・・・」

赤井さんはそういい残して家を去った

俺は手紙をゆっくりと開き、読み始めた

『工藤君へ

私のことはあの人から聞いたと思います

あの子の言ったとおり、私には時間が・・・もうありません

でも、私がこの病気になったからといって、あなたは自分自身を責めないで欲しい

私があなただを治療したのは私の意志だから、あなたのせいではない

そしてこれは、私の最初で最後をお願い

私の娘、秀美を私が死んだら引き取ってもらいたい

あの人にも同意は取ってあるわ

穂乃華と秀美は血が繋がっていない

それを、秀美が知ったらどう思うか・

まだ記憶がないうちに・・お願い

穂乃華にはそれとなく言っておくから・

最後よ

蘭さんと・末永くお幸せに

私があなたと幸せになれなかった分、誰よりも、幸せになってください

この世の幸せを奪い取る悪魔 赤井 志保より』

最後まで綺麗な字だった

俺はすべてを読み終わり、強くこぶしを握って太ももを殴った

「・・・あんだよアイツ・・・

俺は・・・オメエのこと相棒だと思ってたのに・・・

結局・・・結局俺はおいてけぼりかよおおおおお！……！！！」

俺はただ、叫ぶことしか出来なかった

余命（後書き）

急展開ですな

頼み

俺は何に手をつけるきにもなれなかった

結局あれから三日たったが、ずっと家から出ていない

蘭には心配の電話をかけられるが無視をしている

俺が信用されていなかったのか・

どうしてそれを相談してくれなかったのだろう

相棒だと、信じていたのに・
パートナー

毎日を何の目的も無くただボーっと過ごす

それがここ三日間

ベッドの上の携帯が震えた

携帯を携帯する気にもなれなくて、ずっとポケットに入れてある携帯も、放置してある

どうせ蘭だろうそう思った

でもディスプレイを見ると、そこには「赤井秀一」の文字があり、急いで出た

アイツに何かあったのかもしれない・

「はいつ・・・」

「あ・・・工藤君・・・」

実は、頼みがあつて・・・これから家に来てくれるか？」

「わかりました」

俺はすぐに着替え、家を飛び出した

何を考えるわけでもなく勝手に手が電車の切符を買っていて、気付けばあいつの家に行った

「おじゃまします・・・」

「いらつしゃい

突然悪かったね」

出迎えてくれたのは赤井さんだった

「いえ・・・」

あれ・・・宮野は・・・？」

「ああ、今は出かけているよ・・・」

「で・・・たのみ・・・とは？」

「頼みというのは・・・前に言っていた会って欲しいということだ
いてだ・・・」

今度の土曜、家族で出かける事になっているんだが・・・そのとき、
いっしょにきてくれないか？」

「どうして・・・僕が？」

「志保はまだ君の事が好きだ・・・」

でも、志保には時間が無い・・・

だから最初で最後、いっしょに出かけて欲しいんだ・・・

志保だっていつも子供たちとくっついて歩いているから、自分の物
だっで見たいだろう

頼む・・・」

赤井さんに頭を下げられ驚いた

「でも・・・俺が行っても・・・」

「志保の・・・志保の中の時計は・・・10年前から止まったままだ・・・」

だから・・・志保が死ぬ前に、一度だけでいい、思い出を残してあげ
て欲しいんだ・・・」

「・・・わかりました・・・」

少しでも、宮野が生きている時に力になれることがあるのであれば、
それが裏切りになったとしても、いい、そう思った

別れ話

家に帰り、玄関のドアに手をかけると、鍵が開いていることに気がついた

急いで中に入ると、玄関には女物のサンダル

何かあったかのように女性にしては、靴をほおってある

そのサンダルを見てわかった

蘭だ・・

蘭が入ったんだ・・

「蘭！」

「新一ッ・・・」

「何で勝手に入ったんだよ・・

てかどうやって入った？

鍵かけてあるのに」

「ばかっ・・

前に新一のお母さんから心配だからってもらったの忘れたの?!」

「そつか・・・」

「『そつか』じゃ無いわよ!

なんかあつて最近ずっと家から出てこないから、何回もチャイム押しに来たのに、誰も出てくれないし、ちゃんとかぎかかっているし、窓もカーテンしてて中がわかんないし、ケータイも家の電話も出ないし!

それできつと何かあつて当分家から出ないだろうなあと思って、新一の家に夕食つくりに行くための食材でも買いに行こうと思って、たくさん買い物してここに戻ってくる途中の道で、入れ違いで新一の姿を見かけたの!

ずっと心配してる私にも連絡しないでどこに出かけたんだろって思つて事務所の鍵引つつかんでこのドア開けちゃったわよ!!

少しは私の気持ちもわかりなさいよ!!

ずっと心配してたんだよ?!

新一への依頼の電話、もし出られなかったらうちの事務所で受け取る仕組みになつてるから電話のコール音鳴り響いてうるさいから、調べてみたら一件もこの電話で受けてないじゃないのよ!

「一体どうしちゃったの?!」

俺は迷った

今悩んでいる事を蘭に相談するべきなのだろうか・

いや、違うと思う

今しようとしていることは蘭にしたら裏切りだ

そんな事を大の男に頭を下げられてまで頼まれているという事を綺麗に嘘偽り無く誤解もないようにまるつきり話すなんて不可能だ

「なんでもねえよ・

ただ・スランプ・かな?あはは・

「スランプ?

じゃあ今は何で出かけてたのよ!

約二時間よ?

そんな時間まで散歩してたんじゃない?あるまいし」

「なんかどっか行きたい気分だから気分転換に・・さ・」

「はあ？」

でも、これ以上聞いても何も教えてくれそうに無いから、今は聞かないでおくね」

「ああ・・・」

「なんかさ、新一は・・・私よりも上を歩いている気がするんだ」

「え・・・？」

「いつでも私は新一の話を聞くだけ

事件の話、ホームズの話・・・

何でもね

でもさ、私が話したことって新一がいなかった一年間の出来事ですよ？

そんなの、小学生にも出来るよ

そう、私が話すレベルと、新一が話すレベルは違うんだよ

だから、新一は私が話していることに興味心身に聞いたりしないよね？」

「そう・・・かな・・・」

「そう、私たち合わないんだよ

だって新一、高校生の時一流の探偵と同じ扱いをされていた人だもん

一世紀にそんな人が現れるか、現れないか

そんな人と、話が合うのは、私みたいなただの女じゃない

もつとすごい人だよ」

「蘭・・・一体何を・・・」

「別れよう・・・新一

私たち、元から合わないパズルピースしか持ってなかったんだよ

私もう背伸びするのつかれちゃった・・・」

「おい・・・蘭・・・冗談やめろよ・・・」

「ねえ新一、お願い・・・

別れて・・・

コレ、新一のためでもあるんだから・・・」

「おい・・・」

「私・・・私さ、新一のことずっとずっと大好きだった

幼稚園の時から大好きで、よく遊びにも無理やり手伝ってもらった
りしたよね？」

でもそのときからずれてた

そして今も新一は一步先を歩いて私はひとつ下を歩く

そんな事続けてて、新一がどこかにいなくなっちゃって、また戻っ
てきた

戻ってきた時、またひとつ上を歩いてたんだ

透明で見えなかった時

そう、私は新一のこと、何でも出来て、頼れて、いつしよに話して
いるとたくさん面白い事を教えてくれる、お兄さんみたいに見てた
んだよ

でも新一は妹が欲しいんじゃないやなくて、恋人が欲しいの

困った時に相談できる相手が

でも私、事件のことでききづまったりしたとき、相談の相手、聞く
ぐらいしか出来そうに無いよ・・・

恋人失格だね

ねえ、別れたい・・・お願い・・・」

「・・・わかった・・・

蘭がそれを願うなら・・・別れよう・・・」

「ありがとう、新一

でも、お兄さん役でいてね、新一

私たち、いつまでも幼馴染だから」

「・・・ああ・・・」

家から去っていく蘭は、どこかで成長したように見えた

タイトル考え中

「はぁ・・・・・・・・」

たった少しだけ小さく吐いたはずのため息は予想外にも響いた

チロリロリン

メールの着信音がなって、携帯のディスプレイに目をやった

「赤井秀一」という文字だった

メールを開いてみた

「件名なし」

本文は・・・

『出かける日の日程が決まった

次の土曜、朝11時

迎えに行く』

たったそれだけのシンプルなメールだった

く赤井家く

「はあ?!

なんで工藤君を呼ぶのよ!!

「だから、手伝いだよ

もう一人大人がいた方がいいだろ?」

「だからってなんで工藤君なわけ?

他にもたくさん知り合いがいるじゃない!!

「いいじゃないか」

「よくないわよ!」

「だ・・だから・・」

「何よ!!!」

喧嘩では絶対に志保が勝つのであった・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3268x/>

あの頃から・・・

2011年12月11日20時48分発行